ＩＳ－インフィニット・ストラトス　大天使ラファエルの申し子

吉田佳樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ－インフィニット・ストラトス　大天使ラファエルの申し子

【Ｎコード】
Ｎ５７２４Ｒ

【作者名】
吉田佳樹

【あらすじ】
ＩＳ」、本来女性にしか動かせない機動兵器。それを唯一扱える男性、「織斑一夏」
しかし、ＩＳを扱える男性がまだいた。その名は「クルト・エリア」
一夏、そして、エリア、彼らの未来に待ち受けるものは！
※作品に対する建設的な意見や、ご感想は大歓迎ですが、作者個人

に対する中傷や、作品の侮辱等はやめてください。お願いします。

転校初日にトラブルはつきもの？（前書き）

こんにちは、はじめまして、

恋姫の小説を書いているものです。

最近、煮詰まってしまっているので、気分転換で書きたいと思います。

転校初日にトラブルはつきもの？

「ここが、今度から入学することになった。ＩＳ学園か。」目の前の近代的建物を見上げ、つぶやく男性。贔屓目に見ても美形で、間違えば女性に見えてもおかしくない、容姿をしている。

髪は紫、端正な目に、めがねをかけて、制服に身をまとっている。

「おっと、そろそろ時間だ。」左腕についている時計を確認して、駆け足で学園の門をくぐった。

ーーーーーーーーーー

俺は、織斑一夏。何の因果かＩＳを起動してしまって、今はここＩＳ学園で学んでいる。

だが、ここの生徒は俺以外全員女子。はぁ、これはこれで大変だ。

「みなさ～ん、今日は転校生を紹介します。どうぞ。」

「こんにちは、今日から、ここで一緒に学ぶ、クルト・エリアです。」

ん？まさか？

「男？」

「二人目？」

「また一組？」

おいおい、まさか、男がまた来るとは！

ーーーーーーーーーー

「きゃ」

僕が挨拶をすると、「きゃ」という言葉が聞こえた。

「きゃ？」意味もわからず、首をかしげた直後

「キャァァァァァ！！！」

と想像以上の、規格外の叫び声が聞こえた。

そのとき

「静かにせんかばか者！」一喝！たった一度の喝で、教室が静かになった。

「すまん、私が担任の、織斑千冬だ、そしてこっちが」といいながら、隣の女性を指差し

「山田真耶です」と指を指された女性がにっこり微笑みながら自己紹介した。

さて、と織斑先生が、切り出した。

「今日は、お前たちに、クラス代表を決めてもらう」

クラス代表？学級代表みたいなものか？なんて考えていると、となりの席の、「織斑一夏」が話かけてきた。

「いやぁ、マジで助かったよ」

「なにが？」

「男子一人じゃ、とてもじゃないが、耐えられなかった。」なんとなくわかるよ、さっきの一瞬だけで感じたもん。

それから、談笑に花が咲いていると、

「しっかり話を聞かんか、馬鹿ども！」といいながら出席簿で頭を一発・・・。

いたい・・・。

一夏と話しているうちに、どうやら話が進んでいたらしい。ようやくするとこうだ。

「僕か一夏のどちらかか、」ふむと考えていると。

「納得いきませんわ！」金髪（セシリア）お嬢様が抗議してきた。いや、こっちは巻き込まれただけなんだけどね？

それから、原作どうり、セシリアが一夏を怒らせ決闘になる予定だった。そうだった。

「さっきから黙っていらっしゃるけど、あなたもですわよ！まずあなた、所属の国は！男性でＩＳを使えるのならば、どこかに所属しているでしょう。」

これは困った。僕は国に所属などしていない。だから、代表候補生でもない。だが、それは、大きなわけがあって・・・・。

「答えられないんですの？これは傑作ですわ。国もいえないなんて、これではＩＳを起動した言うのも怪しいですわ」好き勝手いいやがって・・・・。

「口を慎めオルコット！」織斑先生が怒鳴った。めんどくさそうではない。本気で怒鳴っていた。

「こいつは国に所属しているんじゃない。したくてもできないんだ。オルコット」

「な、なんですか」明らかに怒こっている。

「お前には両親はいるか？」

「当たり前じゃないですか」

「そうか、だが、こいつには両親はおろか親戚に値する人もいない。なぜならこいつは、各国の研究者達が、共同で作り出した、男性でＩＳに体性がある人造人間だ」初日からばれてしまった。

僕は自分の嫌いなところはない、いや、ひとつだけある。自分が人造人間であることだ。

「人造人間といっても、臓器、皮膚など、人と変わらん、だが、こいつには「もういいです！」・・・そうか」

俺はセシリアをキッとにらんだ。

「お前は俺を侮辱した、だったら、決闘だろがなんだろうが受けてたってやる！」

「ふ、ふん上等ですわ、「ハンデは？」はい？「ハンデはどうすればいい？」いった割にはハンデを要求ですか、「いや、俺は、何割でやればいいんだ？」

「あははｈ」みんなが笑い出した。

「エリアくん、さすがにハンデは、ジョークにしては笑えないよ」などと、口々にいっている。

「５割だ」織斑先生のその一言にクラス中が注目した。

「わかりました。」僕は、俺は、一言言うと、教室を後にした。

転校初日にトラブルはつきもの？（後書き）

これから、がんばります！

ご感想&ご意見、随時募集中！（中傷、侮辱等はやめてください）

主人公設定

クルト・エリア

年齢・１６

身長・１７５

体重・６０

所属国なし、各国の研究者達により意図的に作られたＩＳ適正のある男子の人造人間。

過去、ある事件により研究所のひとつを暴走により破壊。その後、各国の軍を転々とし、ここＩＳ学園にきた。

そのとき、ドイツにも行き、千冬とも面識がある。ラウラとも、もちろん面識がある。

ＩＳ「セラヴィー」

篠ノ野束のコアを開発しようとした、研究者達が、作った、コアとは別のコア、世界にひとつしかないＧＮドライブを使用したＩＳ。これは、人造人間、クルト・エリアにのみ操ることができる機体であるため、実質彼の専用機。もともとは、対基地殲滅用に開発された。

見た目、基本、頭は覆わないＩＳが頭まで覆っている。（ガンダム００のセラヴィーだと思ってください。ということは？もしかして・・・？）

武装・基本的には、ビーム兵器のみ、肩、膝に砲撃がついている。プラス腕にも片方ずつバズーカを持っている。近接戦闘用にビームサーベルもあるが、基本接近戦には不向きである。

単一使用能力・ＧＮフィールド、？？？、？？？

※随時更新します。

決闘！クラス代表決定戦！（前書き）

独自設定で、というか、オリ主が介入したおかげで、セシリア、一夏、エリアの三名で総当たり戦になりました。原作好きの方すいません。

それでは、どうぞ！

決闘！クラス代表決定戦！

「ふん、あんなことといって所詮」私は昨日のことを考えていた。

あの男、クルト・エリア。

「確かに、私も言い過ぎたにせよ、人造人間なんて、信じられませんわ」

そう、仮に、人造人間だろうが、私は負けない。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

昨日のＨＲ以降、クラスのみんなは、といっても一部だが、やはり、怖がり近づかなくなった。

「はぁ、こんなことになるからいやだったのに、まさか・・・・。」うつむきながら考えた。なぜ一日目に・・・。

「そんなことといったって仕方ない。まずは今日の試合を完璧にするだけだ」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

そんなこんなで試合の時間になった。

試合形式は、シールドエネルギーをゼロにしたほうの勝ち。

現在、一試合目が終了してセシリアが１勝、一夏が一敗、一夏の油

断によりというより、ルールをわかっておらずなんとかセシリアの勝利といった感じだ。

そして次が僕の番だ。千冬さんには五割といわれた。だったら五割で行くしかない。

「セラヴィー」僕はそういって、ＩＳを展開した。

そのまま浮いてセシリアの前に行くと。

「何ですのその見た目は、不恰好にもほどがありますわよ？」笑われた。

「どうでもいいさ、それより笑っていられるのも今だけだぜ？」

セシリアは明らかにムッとした表情になり、

「いいですわ、なら、そのよくわからない自信をこのブルーティアーズで蹴散らして差し上げましてよ。」

「はぁ、」と僕がため息をついたとき

「試合、開始！」と戦いのゴングがなった

「セラヴィー、クルト・エリア、行きます。」両手にバズーカを持ち、加速し相手に接近した。

「は、速い！」そう、こいつは、見た目に似合わず速いのだ、まぁ、

ＧＮドライブのおかげだが・・・。

ガシャンと両手のバズーカを両肩に連結して

「ダブルバズーカ、バーストモード！」直後、極太ビームが前方に放たれた。

「くっ！」セシリアは顔をしかめ、ビットを一気に４つはなった。

「ちっ」舌打ちをし距離をとる。

バズーカを肩からはずし、一発、一発打ちながら、距離をちじめる。

ーーーーーーーーーーー

かなりあせっていますわ、いくらいろいろな国にいったからって、このオールレンジの攻撃は見たことも聞いたこともないでしょう、目の前の男は、見るからにでかすぎるバズーカを一発一発打ちながら反撃を試みてはいるが、決定打にかけている。

周りからはどう見ても、セシリア優勢に見えているに違いない。

あれだけ大口をたたいておいて、たいしたこともありませんでしたね。

私は、最後の仕上げとばかりに、一気に畳み掛けた。

ビットを６つ四方八方から囲んで、スターライトｍｋ？の銃口で狙

いをあわせた。

「これで終わりでしてよ！」勝った！と私は思った。

ーーーーーーーーーーーーーー

「エリア君、かなりがんばっているようですけど大丈夫でしょうか」
ピットでリアルタイムに見ていた山田真耶は感心していた。

「ふん、オルコットは油断しているな、こいつが小娘ごときにやられるわけがなかろう。」

横で見ていた織斑千冬は自慢げにいった。

ここにいるみんなは、いや、この会場にいるみんなは、この自信がどこから来るかまだわかってなかった。

ーーーーーーーーーーーーーー

あきらかに、調子に乗っているな。

誰が見ても僕の劣勢。これは認めるだが、見た目が劣勢なだけだ。

ビットが僕を取り囲んだ。そして、ライフルの銃口がこっちを向いている。

「これで終わりでしてよ！」やはりとどめのつもりらしいな。

だが！「ＧＮフィールド！」特殊なコアから出る黄緑色の粒子で全身を覆うバリアを張る。

ドカァァァンという爆音とともにすさまじい土煙が当たり一面を覆う。

センサー上では相手は明らかに止めを刺したと思っている、なぜなら、あそこから一歩も動いてない、しかも・・・、高笑いが聞こえる。少々むかつくな・・・！

「ごきげんよう」挨拶と同時に、ビームを一発。

「なっ！」セシリアは驚愕の表情で僕を見た。そして、とっさに距離をとろうとした

「そうはさせない！」バズーカを捨て、膝から腕をを出しセシリアをつかむ、さらに両腕でもつかむ

「この、はなしなさい！」とビットを放った。そのビットから、４本のビームが僕を襲う。

「ＧＮフィールド！」再びフィールドを展開し、攻撃をふさぐ。

「ば、化け物」セシリアは恐怖からそういった。

「そう、僕は、君達人間の傲から生み出された、戦うことしかできない「人間（ばけもの）」だ！」

そういって僕は、肩の砲撃の方向をセシリアに向け止めを刺した。

といってもシールドエネルギーをゼロにしただけだが。

ビーーー

試合の終了を告げる音が鳴った。

ーーーーーーーーーーーー

この後、僕は、一夏と戦ったが、あの刀と相性が悪く、粘ったが負けてしまった。だが、隠し玉を使えば勝てないわけではなかったが、今は「五割」といわれているので使わなかった。

ーーーーーーーーーーーーーー

私は間違っていたのでしょうか、今まだ私の近くにいた男は、あんなにも強くなかった。むしろ、いつも、腰が低く、女性の顔色ばかりうかがっていた。

「はぁ、」私は、ため息をつきながら、今日の試合を思い出す。

織斑一夏、彼は、完璧な初心者、ルールがわかっていれば、シールドエネルギーが残っていれば、確実に負けていたのは私だ。

クルト・エリア、彼は、まだ本気ではないようだ、証拠に、基本、両手に持ったバズーカ以外では攻撃してない。それにあの機体、あの特殊なコア、現存ＩＳで見たことも聞いたこともないやつだった。それに彼は、最後に自分は、化け物といった。

「・・・／／／」織斑一夏、私はこれに惚れてしまったのだろう、あの強さに打たれたのだろうか。

クルト・エリア、彼も強い、だが、一夏さんの強さを光とするなら、彼の強さは影だ、それもとても濃い、暗い影だ。私は彼にあこがれ恋心以前に恐怖を抱いてしまった。自分が招いた結果なのに、私も彼を傷つけたはずなのに・・・。

「私も、まだまだですわね」そういって、シャワールームから出た。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「はぁ、」なんとか、終わった。厳しかった、セシリアは五割でも限りなく六に近い五割だった。

体中が痛む。脳量子波をつかわなくてよかった。

「化け物」この言葉を僕は嫌う。誰も好き好んでこうなったわけではない。

だめだ、このままではまた黒い感情に押しつぶされそうになる。

「寝よう。」そういって僕はベッドに入り目を閉じた。

決闘！クラス代表決定戦！（後書き）

セシリア戦終了！

次は、ついにあのキャラが登場！？

では、次回をお楽しみに！

ご意見&ご感想、随時募集中！（中傷、侮辱等はやめてください）

またまた転校生？しかしそれは・・・。（前書き）

ようやく？鈴の登場です。

わーい、わーい。

でも、ちょっとシリアス？

それではどうぞ！

またまた転校生？しかしそれは・・・。

あれからしばらくして、クラスのみんなも、ようやく僕を怖がらなくなってきた。しかも、通称のほほんさんには

「くえり～」いう、なぞのあだ名をいただいた。クルトのクとエリアのエリをつなげているのだろう。

でも、なぜ頭をつかう？なぞだ・・。まぁ、別段嫌っているわけじゃないからいいか。

それにしても、あの後、結局、決闘では3人共一勝一敗だったから、クラスで多数決したところ、セシリアが、一夏に投票したことにより一夏がクラス代表になった。

厄介事はごめんだったので正直ありがたかった。

その後も普通の日々が待っていた。そう、少なくとも今日までは、あいつが転校してくるまでは・・・。あの過去から逃げていられたのに取り返しのつかないことをしてしまったあの過去を・・・。

今クラスでは、クラス対抗戦の話で盛り上がっている。なぜなら、専用機持ちが、一組と四組にしかいないからだ、その結果、一組と四組の一騎打ちになるだろう、しかも、一夏の単一能力はエネルギーを消す能力だ。これはかなり有利な能力だ。

これは、一夏ががんばれば優勝できるかなと考えていたとき、その声が聞こえた。

「その情報遅いよ」

入り口の片方に寄りかかりドアを片足で押さえて立っている。

まさか・・・！

「おい、おまえ、鈴か？」

「そう、私が、中国の代表候補生、王・鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」ふっと笑みを漏らす。人目を引くツインテールが左右に揺れる。

「り、りーちゃん・・・？」その声は、誰にも聞き取れないほど小さな声だったはずだが

「エ、エリア？」僕と鈴は目を合わせたまま立ち止まってしまった。

その光景に、セシリア、箒はもちろん、一夏でさえ固まってしまった。一瞬にして空気が凍るとはこのことだ

その沈黙を破ったのは

「おい」千冬さんだった。

「ち、千冬さん」バシン！出席簿が鈴の頭を襲った。

「織斑先生だ。早く行け、ＳＨＲの時間だ。」

「は、はい」鈴は返事だけすると、逃げるように、二組に戻った。

何の因果だろうか、あの忌まわしい過去をようやく忘れられると思ったのに。

「なんで、会っちゃうんだろうな。」そんな言葉をポツリとつぶやいた。

その後の授業なんてまったく耳に入らなかった。

ーーーーーーーーー

私は、一夏がテレビで出ていて、気になってというか、元々好きで、一夏と一緒にすごすために、国に無理まで言って、このＩＳ学園に転入した。

だけど、どうして、どうしてあいつがいるの？あいつは、私を・・・

「鈴音さん？ここは、なんでですか？」

え？っと左右に首を動かしまわりを確認する。

そう、今は授業中、私は考えていて授業中ということを忘れていたらしい。

私は正直に

「聞いていませんでした。」と答えるしかなかった。

バシン！出席簿でたたかれた

この学園の先生は出席簿でたたくのが癖なのだろうか？とどうでもいいことを考えながらとうとうお昼になってしまった。

ーーーーーーーーーーーーー

ガラッ

案の定鈴は来た。

そして、一夏を通り過ぎ俺のところまで来て

パシン！

俺の頬をたたいた。

「馬鹿！どこ行ってたのよ！心配したじゃない！」泣きそうな声で目に涙を浮かべキッとにらみながらそういった。

「ごめん」

「ごめんじゃないわよ！いつも、いつも、気がついたらいなくて、忘れたと思ったら帰ってきて・・・」それから、何もいわずにいや、いえずに僕の胸に飛び込んできた。

僕はそれを受け止め

「ごめん」それしかいえなかった。

「ばかばかばかばかばか」

「ごめん」僕はただ、鈴の馬鹿を聞きながら、頭をなでごめんということしかできなかった。

鈴が泣き止んだころ、教室は静まり返っていた。

さすがに以後ことが悪くなり

「鈴、食堂行くか、一夏もみんなも、ちょっと、食堂に行こう。みんな」とクラスのみんなに言う

「ちょっと、僕達は午後の授業に出れそうにない。だから、織斑先生に言っておいてくれないかな、過去のことで、用事があると」

すると、クラスの何名かわかったといってくれた。

それから、いつものメンバープラス鈴で、食堂に行った。

「なんていえばいいのかな、僕が、人造人間だということをみんなもう知ってるよね、その研究の一環で、6歳ぐらいのときに中国にいたんだ。そのとき知り合ったのが鈴だ」

「でも、なんで、こんな状況に」とセシリアは目の前の状況に少々困惑しているようだ。

「話せば長くなるんだけど」いいながら僕は、隣の鈴の頭をなでる

「６歳のとき僕は、中国で、いろいろな実験をしていたんだ。そのときその研究所によく鈴が遊びにきたんだ。何回か会ううちに、仲良くなってね、それから、研究所の外でも遊ぶようになったんだ。」

だけど、と僕は続けた。

「事件は起きたんだ。みんな、１０年前に起きた大きな事件ってわかる？中国で起きた。」

「まさか！」セシリアはいち早くわかったらしく驚きを隠せない。

「そう、そのまさかだよ。表向きには原因不明の事故により研究所一個の消滅となっていたと思うけど、本当は、僕がやったんだ、たった一人で、研究の機器の不具合でね、僕が暴走してしまったんだよ。そして、そうとは知らず僕と遊ぼうといつもどうりあぞびに来た鈴は事故にあった。といっても死んだわけじゃない。むしろ逆だ。あの事故のたった一人の生き残りが鈴だ」

そのカミングアウトにみんな息を呑んだ。まさか、教科書に載っている事件の張本人がここいるとは思わないからだ。

「鈴が来たときは、もうすでに研究所の大半が破壊しててね、心配した鈴がさらに中に入ったら僕と合ったのさ、ちょうどそのとき、僕が放ったビームで鈴の上の屋根が落ちてきてね、そのとき、僕はようやくわれに帰ったんだよ、そして、ぎりぎりのタイミングで鈴を助けることができたんだ。だけど、僕は代わりに重傷を負ってね。仕方がない、鈴をかばって瓦礫を直で受けたんだから、でも、僕は死ななかった。いや、死ねなかった。」

「どうして、」一夏が聞いてくる。

「うん、それはね、このことの発覚を恐れた各国の研究者達をはじめとするお偉いさん方が、緊急で中国外の国に移送したんだ。そして、僕は、また、生態ポッドに入れられて、蘇生させられた。鈴は僕が空に上がるまで、ずっと、僕の名前を呼んで泣いていたよ。」

「そうでしたの。」セシリアがそういったとき

「ごめんもういいから」鈴が落ち着きそういった。

「大丈夫か鈴？」一夏がそういうと

「大丈夫って言ってるでしょ！」といつものように、いった。

もう大丈夫だろう。僕は安心してその場を後にした。

その後、この件を織斑先生に報告し、部屋に戻った。そして、することもなかったので寝た。

今日は何も食べる気にならなかった。

次の日。

なぜか鈴と一夏が喧嘩状態だ。

詳しく聞いてみると、約束がどうのこうのらしい。

はぁ、相変わらずだが、一夏は鈍感すぎる。

鈴も一夏がすきなんだな

そう思ったときに胸がチクッと痛んだ。

僕には鈴を好きになる資格がない。そう言い聞かせて、普段どうり振舞った。

それから、一週間。なぜか、仲直りもできずに試合当日。

相変わらず鈴は怒こっているし。一夏はわかっていない。

「今ならまだ許してあげるけど」と鈴が言うと

「だから、鈴は何をそんなに怒ってるんだ、約束はちゃんと覚えてたじゃねぇか」

と一夏が言う。

「だから、そうじゃなくて！」と白熱しそうなので、部分的にＩＳを展開して二人の間に割って入り

「やめろよ、今から試合なんだから、正々堂々そこで決着をつければいいだろ？」

そういうと二人は

「まぁ、それもそうよね」「まぁ、そうだな」

と納得してくれた。

そして、試合がスタートした。

僕と、箒とセシリアは先生達と一緒にピットで見ていた。

試合は、鈴の一方的なワンサイドゲームだった。

一夏も突破口見つけようとしているが

鈴のＩＳ「甲龍」の「竜咆」の見えない砲身と衝撃砲がきつくてつらそうだ。

そろそろ、鈴の勝利で終わるかと思ったところ突如遮断シールドを破り、正体不明のＩＳが飛来した。

そのとき、僕の頭にピリッとした感覚が走った。

正体不明のＩＳは二人を攻撃しようとしている、画面では間一髪で、一夏が鈴を抱えて避けている。

周りでは先生が二人に呼びかけたり、セシリアが織斑先生にＩＳ強化を進言したり。

だがそんなことはどうでもよかった。なぜこのタイミングで脳量子波が？

いやな予感がする。あれは人じゃない。僕と同じ化け物だ！

「織斑先生！」叫んだ。

「どうした」先生はいつもどうり冷静に聞いてきた。

「あいつは危険です。僕に行かせてください。」そういうと、セシリアが

「あなたわかってますの？遮断シールドがレベル４まであがっていて、入ることもできないんですのよ。」

そんなことはどうでもいいというように先生は

「それでも行くのか？」と聞いてきた

「はい、行きます！」

「そうか、気をつけろよ」

「わかってます。」

そういうと、僕はアリーナに進入できるポイントに急いだ、早く行かないと鈴が、いくら鈴が一夏がすきでも、それでも、それでも僕は・・・。

「ここか！」ポイントに到着してＩＳを起動し僕は叫んだ

「トランザム！ＧＮバズーカハイパーバーストモード！！！！」

全身のバズーカから、ビームが圧縮され中心の銃身に集まる。

「イッケェえええぇぇえ！！！！！！！！！！」

ドゴッゴオゴゴゴゴン！！！！！！！！！！！

すごい音と共に遮断シールドの一部にぽっかり穴が開いた。

「一夏！鈴！」

その声に二人反応し、こちらを向いた。

そのとき、敵は、注意がそれた鈴に向かって一筋のビームを放った。

ーーーーーーーーーーー

いきなり声がした。それは先生ではなくエリアだった。

その声に反応して、見上げた瞬間、敵は私に向かってビームを放ったみに備えた。だが、一向に痛みはこない、まさか、まさか・・・

「ああ、これで死ぬのかな・・・。」私はそう思い、目を閉じて痛

ーーーーーーーーーーー

「鈴！」ビームに反応して僕は一気に加速した。そして、鈴の前に立った。

「ぐッ！」痛みで顔をしかめる

「大丈夫！？」鈴が効いてきた

「この程度じゃ俺は、許してもらえないんだ。これ程度じゃだめなんだぁあぁぁ！」

鈴はわからないという顔で泣きそうだった

そのとき頭に何かを感じた、反射的に敵を見ると、敵から、思念のようなものが送られてきた。

（オマエハオレタチトオナジツクラレタモノダ、ソウ、オレタチハバケモノダ、ダガ、ナゼオマエハニンゲンヲマモル？）

俺はそれに答えるように目の色を金に変えいった

（決まってるだろう、それは、僕も化け物ではなく人間だからだ。それを僕はここ生きて教えてもらった。だから、僕はここを守る。それ以上でも、それ以下でもない！）

いい終えると僕は叫んだ

「セラフィム！」直後

ガチャン

背中の部分ががはずれ、全身真っ黒の人型になった。

そして、大の字になって空に上がった。

刹那、敵の動きが完全に停止した。

「一夏！あいつはお前らの考えているとおり、無人機だ、今のうちだ、やってしまえ！」

「うぉおおおおおおおお」と一夏は停止した敵に向かって加速し、一気に切りつけた。

そして、

ドゴゴゴゴオオォオオオンン！！！！！

という爆発音と共に敵は消滅した。

「ハァハァはぁ、よかった。」それだけいうと、僕はそのまま地面に落下した。

最後に鈴の叫び声だけが耳にこだましているのを最後に僕は完全に意識を失った。

またまた転校生？しかしそれは・・・。（後書き）

ちょっと急すぎたかな？

でも、何とかやりきることができました。

過去の話はいつかまた詳しくやります。

ご意見&ご感想、随時募集中！

戻ってきた日常

「うっ・・・！」意識を取り戻したとたん、痛みが全身を襲う。

「気がついたか」隣にいたのは織斑先生だった。

「まったく無茶しおって、まさか、トライアルフィールドまで使うとは。」やれやれというように両手を挙げながらいう

「すいません。でも、あの時はそうするしかなかった・・・気がします」自信なさげに言うと

「別に攻めているわけではない。むしろ感謝している、不足な事態の割には被害があの程度で済んだのはお前のおかげだ」いえいえと謙遜する。

「だが、お前はあいつらにちゃんと説明しなければならないぞ。かなり心配しているからな、特に王が」その言葉に胸がちくりと痛んだ。心配をかけないつもりがこうなってしまった。

「はい、後日ちゃんと説明します。」そういうと、織斑先生は「そうか」といって出て行ってしまった。

織斑先生が出て行ったことを確認すると、僕は考えた。

トライアルフィールド・・・ＩＳのコアに干渉し、行動不能にする特殊な周波を発する技。だがこれは諸刃の剣で、これを使用すると使用者の体を傷つける技。ゆえにこれは本当に大切なとき、一大事にしか使用できない。

トランザム・・・GNドライブの特殊能力、一定時間、すべての能力を3倍まで引き上げる。しかし、使用後、一定時間、能力の低下を招く。

一癖もふた癖もあるISを僕は使っている。いや、これ以外僕は使えないし、僕以外これを使える人はいない。

なぜ、あの時、僕は・・・と考えているうちに意識がまどろみに落ちていった。

その後、みんな、お見舞いに来てくれたが、結局鈴は来てくれなかった。

元々人造人間だからだろうか、普通よりも怪我の直りが早いらしく。二三日で普通の生活に戻ることができた。

復帰初日、教室に入るや否や、クラスメートから、大丈夫？などの言葉をかけられた。適当に大丈夫と答えて席に着くと、ちょうど、SHRの時間だったらしく、織斑先生たちが入ってきた。

先生達の話では先日のクラス対抗戦は、無効の中止らしい、それもそうだろう、あれだけのことが会って続ける気にもならないだろう。

その日は久々に、みんなで過ごした。でも、そこに鈴の姿はなかった。

そして、夕方。自主練も終了して、ロッカーで着替えて、自分の部屋に戻ってベッドに座る。久しぶりの日常に、少し疲れたらしい、

時間は少し早いが、少し寝るかと思いベッドに入って寝た。

それからどのくらいの時間がたっただろうか

人の気配がする。

「・・・ア」よく聞き取れない声がした。

僕は、考えた。そして、うちにいる自分に問いかけた

起きるｏｒ狸寝入り？・・・・答えは・・・狸寝入りだ

そう決心して寝たふりを続ける。

すると、息がだんだんと近づいてくる。

同時に声もはっきりしてくる

「エリア、ありがとう」今度ははっきり聞き取れた。その直後唇に何かやわらかい感触がした

これは、まさか？いや、そんなはずは・・・・と思考が混乱して誤って目を開けてしまった

そして目の前にいたのは、鈴だった。

とっさに口を離し

「ぷは、鈴どうしてお前がここに？」というとしれっと

「だって今日から私もここで暮らすもん」というではないか

そして、目を潤ませ、頬を紅潮させこういった。

「好きです。付き合ってさい。」と

僕は、天と地がひっくり返ったようにその場に固まった

戻ってきた日常（後書き）

短いです。

しかも省略しすぎです。すいません。

次回は、続きです。当たり前ですけどねw

衝撃の告白！&またまた転校生！？しかも一人は男子？（前書き）

告白からの話です。

長々お待たせしてすいません。

衝撃の告白！&またまた転校生！？しかも一人は男子？

「好きです。付き合ってください」

と鈴は言った。僕はその場に固まってしまった。

「おいおい、そんな、冗談だろう？」何とか声を出し答える

「冗談で言えるわけないでしょ！」

「でも、お前って一夏のことが・・」と反論しようとしたが

「それは、エリアにあう前まで、というより、エリアがいなくなってから再会するまでかな」

開き直ってるよ・・・・。

「で、そうなのよ・・・／／／」頬を紅潮させながら聞いてきた。

鈴のことがすきか？好きかと聞かれればもちろん好きだ、だが、僕は人間ではない。そんな僕が・・・

「もしかして、自分が人間じゃないとか、そんなこと考えてる？そんなのは関係ないわ、あなたは人間よ、私が保証する。」そういいながら、起き上がっている僕を抱いてくれた。そのときなぜか僕の瞳から一筋の涙が、その後たまることなく涙があふれてきた。

そうか、僕はこういう風に言ってほしかったのか

「ありがとう、僕は誰かにこういってほしかったんだ。あなたは人間だと・・・そしてそれを鈴が言ってくれた、ほかの誰でもなく鈴が言ってくれた。もう一度言う、ありがとう、そして、こちらこそ、よろしくお願いします。」涙でくしゃくしゃの顔だったかもしれない、でも僕は精一杯の笑顔で鈴の気持ちにこたえた。そしてその後、僕達は、もう一度、口づけをした。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

恥ずかしい夜から一夜明けて、はれて僕にも人生初の恋人ができた。あのあと、もう一度聞いた。こんな僕でいいのかと、あの忌々しい事件を起こした張本人であると、また暴走することがあるかもしれないと、そしたら鈴には「くどい！」と一喝されてしまった。

今僕の隣には鈴が寝ている。結局あの後そのまま二人で寝てしまった。

「おはよう」目が覚めた鈴に声をかけると

「うん、おはよ、えぇえぇぇ！！！！！」キーンと耳がなったがこのままではいろいろとやばいそう、主に女子からの質問攻めに合う僕自身が

咄嗟に口を塞いで騒ぎになることは避けた。

「ぷはっ、はあはあ、ちょっとなにすんのよ！」

「いや～だから、さけばれると後々面倒なことになるんだよ」その後、何とか鈴を説得して食堂へ、そして、クラスが違うので、一組前で別れた。

「おはよう」そうクラスのみんなに挨拶をすると

「ねぇねぇ、鈴さんとどんな関係？」とか何とか鈴との関係についてきかれた。

まさか、一日も経たずしてバレルとは・・・女子って恐ろしい・・・。すると二組から

「うるさいわね！エリアと私は付き合ってるの！なんか文句ある！」と聞こえてきた。

観念して

「はぁ、聞いてのとおりです」と両手を挙げ降参のポーズをとる。

すす炉たかっていた女子達は口々に、負けた、とか、まだ織斑君がいるとか言って自分の席に帰っていった。

キーンコーンカーンコーン

チャイムと同時に山田先生が入ってきて

「皆さん今日は新しいお友達を紹介します。デュノア君、ボーデヴィッヒさん、入ってください。」そういうと二人の生徒が入ってきた

そういえば今先生君って言わなかったか？

「はじめまして、シャルル・デュノアです。よろしくお願いします。」

と男子の制服をした転校生が自己紹介をすると、

また回りの女子達が騒ぎ出した、

「美形！」

「しかも、守ってほしい一夏君、クールなエリア君とは違って、守ってあげたい系」となにやらテンションがあがっているそこに

「馬鹿もん！」やっぱり・・・。この一言により回りは静まる

「挨拶しろ」

「はい教官」

教官？

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」

「以上ですか？」山田先生がなみだ目で聞くと

「以上だ」と断言されてしまう。山田先生は涙を浮かべて教卓に突っ伏している

「貴様が！」そういうと、キッと一夏をにらむと目の前まで行き手を振り上げた叩こうとした。

パシ

「やめときな」その手を止めて一言言った

「ドイツの改造人間さん？」そういうと手を振り解き

「貴様・・・」と怒りを見せている

そして、と僕は、シャルルのほうを向き

「デュノア社の〝息子？さんが今更僕に何の用かな？」と不敵な笑みを浮かべて聞いた。

この意味深な発言の意図が分からないクラスのみんなはポカンとしていたが、唯一織斑先生だけが分かっていたようだった。

その後、着替えに行く最中に一波乱があり、出席簿アタックを食らうという不幸に合う。

今日の授業実戦訓練だった。

「今日は、戦闘を実演してもらう、凰、オルコット、お前達に頼む」

「な、なぜ私が」

「何で私が」と口々に言っている、ところに先生が

「少しはやる気を出せ、アイツらに、いいところを見せれるぞ」とそそのかすと

「そうですわね、このイギリスの代表候補生の（以下略）」

「そ、そうねそういうことなら・・・／／／」と顔を赤くしながら、こちらをちらちら見てくるので、

「がんばって来い」と一言だけ言ってやった

丁度そのとき

「どいてくださぁあああいい」という、癒し系の声と共に何かが振ってきたしかも、僕の真上から

「間に合え、セラヴィー」セラヴィーを展開しなんとか、キャッチすることに成功した。よく見るとそれは山田先生だった。

「あ、あの～大丈夫ですか？」

「え？あの、えっと大丈夫です」そういうと、自分からしっかりと地面に足をつけ降りた。

ふう、とＩＳを元に戻す

「今回お前達に戦ってもらうのは山田先生だ」そういうと、二人は二人はちょっと・・・と言っていたが、織斑先生により「安心しろ一瞬で終わる」と言われてしまった。これにはさすがに二人も怒ってしまった。結果から言うと、連携が取れていない二人を的確に追

い詰めていって自滅に追い込んでの先生の勝利だった。いつもはぽわ～んとしてるけど、やるときはやるんだなと思ったと共に、この学園の教師人はすごいと改めて思わされた授業だった。

授業の後、適当に着替えを済ませ、午後の授業を受け、鈴と一緒に夕飯を食べ部屋に戻り、お互いの話もした。まぁ、大半が鈴の愚痴なわけだが、この上ない幸せを僕は感じていた。

ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・彼女は僕とは違う形で作られた人間だ。もちろん人造人間ではない。

いうなれば戦闘用に改造された人だ。

「はぁ」ため息とつくと、鈴が心配そうに

「どうしたの？」と聞いてくるので、

「なんでもないよ」とやさしく答える。

その後は、鈴が駄々をこねるので仕方がなく一緒に寝た。鈴は布団に入ってすぐに寝たが僕はなかなか寝付けなかった。

シャルル・デュノア、あいつは多分かわいそうな役目を担ってるんだろうな。

ラウラ・ボーデヴィッヒ、多分僕と同じ気持ちになっているのだろう。などと、二人のことを考えながら自然と眠っていた。

衝撃の告白！&またまた転校生！？しかも一人は男子？（後書き）

次回は、練習中に、２回、ラウラとぶつかります。

近いうち、更新します。

ぶつかり合う二つの人間《キカイ》（前書き）

人間と書いてなぜ機械か、それは、ラウラもエリアも元は戦闘のために作られた存在だからです。

それでは第7話どうぞ！

ぶつかり合う二つの人間《キカイ》

あれから数日たった。

今クラスでは学年別トーナメントの話題で持ちきりだ。なにやら、トーナメントで優勝すると一夏と付き合えるらしい。

まぁ、これは、箒が、一夏に宣言したものが尾ひれがついて広まった拡大解釈されたうわさだ。

「・・・不幸だ」某ツンツン少年のような台詞を口にする。

鈴との一軒以来、女子達の興味が薄れてくれたのは助かったが、噂のせいで、授業に集中もできない。とにかくうるさいのだ、学級崩壊もいいところである。織斑先生がいれば問題ないのだが、山田先生のみだともはや収拾がつかなくなっている。

もう、あきらめよう・・・。その後の授業はまともに聞いてなかった。ただ、この時期に転入してきた二人が気がかりだったが・・・。

半ば適当に受けていた授業が終わり、放課後になった。

さすがに、トーナメントが近いだけあってアリーナ内では、たくさんの生徒が訓練に励んでいる。

そんな僕もいつものメンバーと一緒に練習しているわけだが・・・、ほとんど一夏に付きっ切りで僕の練習にならない。

「あの～誰か僕と練習でも・・・」しませんか？といおうとしたの

だが、

「だまっていてください！」「だまれ！」と一喝。

はいはい、どうせ僕は・・・。といじけていると、アリーナにひとつの機影が。

「あれはドイツの」といったら

「第三世代」誰ともなく呟いた。

「貴様は専用気持ちだな、ならちょうどいい、私と勝負しろ」と一夏を指差しいった。

大して一夏は

「いやだね、こっちには戦う理由がない」ときっぱり断った。

「なら、いやでも戦わせてやる」そういうとラウラは左肩の実弾砲をいきなり発砲した。

「なっ！」いきなりだったため誰も動けなかった。

ズギューン

独特のビーム音にあたりが静まり返った

「はぁ、戦闘狂（バトルマニア）はこれだから困るね！」

僕は両手のバズーカを連射しながら接近した。

「くっ」苦い表情を浮かべ後退していくラウラ

こっから攻めようかというとき、会場のアナウンスで先生から警告を言われた

「ちっ！今は引く」そういい残すと、ラウラは去っていった。

姿が見えなくなるまで確認すると、ＩＳを解き、一夏の元に駆け寄る

「大丈夫か一夏？」

「ああ、ありがとう」

「あいつのことを悪く思わないでくれ、本当はまじめでいいやつなんだよ。」僕はそういうと、地面に尻餅をついている、一夏に手を差し出した。

「ああ、あいつが俺を狙う理由も分かるからな」そういいながら僕の手をとって立ち上がった。

その後僕達は、あんなことがあった後なので練習する気も起きず、そのまま、部屋に戻ることにした。

「じゃあ、俺達ははこっちか」と僕とシャルルにいった。

「えっ！？」と混乱気味のシャルルに一夏は

「どうした？」といってる。

まあ、シャルルが女だと知っているのは多分僕だけだろう。一時期フランスに行ったときに知った。

知っているといっても、顔見知り程度。あっちもまさか僕がいるとは思ってなかったみたいだ。

「おい、一夏、シャルルはもうちょっと練習したいみたいだから、先行こうぜ」

「そうなのか？」という質問にシャルルは

「うんうん」と必死に首を縦に振っていた。

そうか、というと一夏はさっさと更衣室に向かった。

「おい、シャルル、いや、シャルロット、僕はお前に、なぜここに来たとは無理には聞かない。言いたくなったらでいい、まぁ、言わなくても大体の理由は分かるけど、ホント最悪だよなお前の親は、だからさ、この学園の中だけでもさ、一夏やみんなと楽しんだら？」とそれだけ言い残し立ち去った。

アリーナに残ったのは、ただ呆然と立ち竦むシャルルだった。

僕が更衣室に行くと、一夏が山田先生の手を握ってぶんぶん振って喜んでいた。なにやら、風呂がもうすぐ使えるらしい。

それはとても喜ばしいことだが、そんなに喜ぶことか？

その後、自室に戻り、鈴と共に学食で夕食を終え、部屋に戻り、い

つもどおり他愛もない会話を楽しんだ。

そして、次の日・・・。

まぁ授業は「不幸だ・・・。」という言葉で察してください・・・。

そして、いつもどおり放課後は、トーナメントに向けて練習する。

まぁ、いつもどおりのやり取りに苦笑しつつ和気あいあいと練習しているところに、ドゴォンという爆音と共に機影がひとつ。

もちろんそれはラウラだった。宣言どおり昨日で終わりではなかったようだ。

「なにしてんのよ」と鈴はセシリアと二人ラウラに向かっていく。

普通の場合、二対一で二人が有利に見えるだろう、だが、現実はまったくの逆だった。

「ちっ、ドイツはついに完成させたのか、完全停止結界を」そう呟く僕にみんな聞いてきた

「それは何だ」

「簡単に言うと、意識を集中したものを完全に停止する機能だ。僕がドイツにいたときはまだ実験段階だったのに」苦虫をつぶすように僕は下唇をかんだ。

説明している間にも、二人は追い詰められていた。必死の作戦もラウラには効果がなく、万事休すだ。

そこに怒った一夏が単騎で突っ込んでいった。

「馬鹿、やめろ！お前がかなう相手じゃ」

「うるさい、あいつは俺の友達をぼろぼろにしたんだ。借りはかえさねぇとな！」

だが、やはり停止結界に阻まれうまく攻撃できない

「ふん、所詮停止結界の前では」ズギューン

「ぐはっ！」背中から直撃を受けたラウラは一夏から意識をそらし上を見た。

その瞬間に一夏は解放されシャルルと体勢を立て直している。

「クルト・エリア・・・！」怒りをあらわにするラウラに僕は最大の攻撃をぶつけようとする

「ハイパーバズーカ、フェイスバーストモード！」刹那

目の前にピンク色のエネルギーの球体がどんどん大きくなっていくと同時に背中の凸凹がガチャンと開き、中から顔が出てくる。その目や口から黄緑色の粒子がこぼれる。

「・・・目標を破砕する」と感情もなく言う

「チッ！こんなものも私の停止結界の前では、」と停止結界を発生させてそれを止める。

「甘い！」僕は撃ち終わったと同時に後ろに回りこみ、すぐ背後に来ていた。

「何！？」この状況で結界を解くと、エネルギーの玉があたる。だがとかないと僕の攻撃を食らう。

ガチャン、ガチャンと両手のバズーカを肩に付け、両手と膝から隠し腕を出し、ラウラを背後から抑える。

「チェックメイトだ。今日は手を引け」そう諭すように言うと

「私はまだ」と抵抗してきた。そこに・・・

「やれやれ、模擬戦は結構だが、さすがにアリーナのバリアを破られると黙認するわけにはいかん。」

スーツ姿にＩＳ用ブレードを持った織斑先生だ。

「全員武器を置け」その言葉にその場にいたメンバーは、戦闘を中止した。

「これより、トーナメントまでの私闘を一切禁ずる。いいな」

みんな、はい、と答えて事なきを得た。だが、鈴とセシリアは思ったよりも怪我がひどいらしく、トーナメントに出られないらしい。

二人を一夏と箒と見舞っていると。

保健室の壁が突如ドドドドドとゆれ始めた

な、なんだ？

ドカァァアンという音と共に女子の大群が押し寄せてきた。

「織斑君私とパートナーを」

「いいえ、私よ」

「あれ？凰さん怪我で出れない？だったらエリア君もフリー？」

「だったらエリア君は私が」とこのように女子達が口々にパートナーを希望してくる。

参ったな、鈴以外と組む気はないし、って鈴さん？そんなに睨まなくても・・・。

と視線で会話しているうちに一夏はシャルルと組むといって何を逃れている。そうなるとおのずと標的は僕になるわけで・・・

『エリア君！』と全員に言われるわけで・・・って鈴さん、睨まないで・・・。

「えっと、僕はもうパートナーがおるわけで・・・」とどっかの方言のようにしどろもどろ言うと

「なんだ」とか口々に言いながらみんな去っていった。

保健室を後にし、ある人物の元へと行く。その相手は・・・ラウラ・

ボーデヴィッヒ。

ぶつかり合う二つの人間《キカイ》（後書き）

中途半端かもしれないけどここまで。

次は近いうち更新します。

学年別トーナメント（前書き）

ラウラとエリア二つの怪物（バケモノ）が交差するとき物語は始まる。

学年別トーナメント

今僕はある人物の部屋の前にいる。

コンコン

ドアをノックすると

「誰だ」

部屋の主から返事があった。

「僕だよ、エリア、クルト・エリアだ。」

「何のようだ。」そっけない返事だった。

「いや、ちょっと、ね」

「だから、何だというのだ!」バアン

僕の煮え切らない態度に痺れを切らしたラウラが自分でドアを開けてきた。

「ようやくあけてくれた。」

「むぅ」仕方がないといった様子で僕を部屋の中へ案内する。

「今日お前の部屋に来た理由は・・・」

そう切り出してから2時間ほどたった。

「そろそろ戻るよ」

「そうか」

名残惜しそうにいうと手を振って分かれた。

ーーーーーーーーーーーーーー

次の日、トーナメント表が発表になる日だ。

「おい、エリアお前は結局誰と組んだんだ？」

「うん？えっと、お前風にいうとセカンド幼馴染？」

「何で疑問系」と一夏、シャルと僕の三人でいつもどおりの他愛もない会話をしているうちに、トーナメント表が発表される時間になったようだ。

一回戦

「一夏、恨みっこなしな？」

「ん？ああ、いいぜ」

ラウラ・ボーデヴィッヒ、クルト・エリア組対織斑一夏、シャルロット・デュノア組

「「な」」

二人とも絶句である

「まぁ、そういうことだからさ、正々堂々戦おうか」

トーナメント表を見た後、パートナーの元へ行った。

昨日部屋に行った後、

「僕のパートナーになってくれ」

「いやだ」

という、ことを何度か繰り返し、根気勝ちした。

まぁ、一夏を好きにしてもいい。かわりに、殺すな。ただそれだけをいった。

その後は、ドイツにいたころが懐かしくなり二人でそのころの思い出話、僕がほかの国に行ってからのドイツについてなど、話に花が咲いて結局予定よりかなり遅くなってしまった。

「本当に私なんかでよかったのか？」そう聞いてくるラウラに対して

「いいんだよ、お前達二人の問題を解決するためにはこうするのが一番だ。それに、ほかのやつにらウラの力を引き出せるパートナー

はいないと思ったから。だって、どうせやるなら優勝したいし」

「そうか」そういったらウラの表情は心なしか微笑んでいるように見えた。

こいつは根はいいやつなんだよ。僕みたいに戦うために生まれても・・・。

そして、決戦のときは来た。

「約束どおりあいつには手を出すな」

さっきの表情がうそのようにいつもの冷酷な顔に戻っている。

頭じゃ分かっていてもやっぱり無駄よな

「わかったよ、思う存分やって来い。こっちは任せとけ」お互い頷きあい。

ピー

試合開始の合図がなった。

開始直後から、シャルはこっちに向かってきた。

「なんで、こんなことを」

「これが最善だからだ」

お互いに打ち合いながら、

それから少し距離をとり

「ダブルバズーカバーストモード」両手のバズーカを肩に連結させた

「くッ」

さすがのシャルも近づけず、ビームを交わして迂回してくる。

「そのビーム当たると怖いけど、接近されたら攻撃できないんじゃないの？」

「なにッ、コノクソヤロォオオ」

迂回を開始した直後、シャルは、ぶっつけ本番で瞬間加速をやってのけやがった。

「これで終わり！」

シャルのランチャーが僕を捉える

ドゴォオオンン

ーーーーーーーーーーーー

「二人は咲にエリア君を倒す作戦なのかしら。」山田麻耶がモニターを見ながらそういった。

「そうだろうな、だからあいつらはガキなのだ」千冬はそういいながら、モニターからそっと目を離した。

「そうでしょうか、織斑君とデュノア君のペアはとてもチームワークができています。それに比べ、ボーデヴィッヒさんとエリア君は・・・あッ、今デュノア君がエリア君を倒しましたよ。」

ワァアアアア

ちょうどアリーナの完成が聞こえてきた

「山田先生も、生徒達ももっと状況を見てほしい」

「？」千冬の意味深な発言の意図が麻耶にはまだ分からなかった

ーーーーーーーーーーー

ドオオン

「くッ」

横からラウラにランチャーがヒットした

「終わったのか？」

「ごめん遅くなった一夏」

「エリアは？」

「あそこ」シャルは爆煙を指差しいった。

「じゃあ、行くか！」

「うん」

一夏と、シャルの二人が連携を駆使しラウラを追い詰めていく。

停止結界の弱点を見つけられ、じりじりと追い詰められている。

ーーーーーーーーーーーー

「やっぱり、織斑君とデュノア君はすばらしい連携ですね」

山田麻耶はいまだ表面上しか見えていない。

「先生、よく見てください。ここ」仕方がないとばかりに、モニターの一転を指差す。

そこには微動だにしない、セラヴィーがたたずんでいる。

がしかし、

「背中から粒子が？」そう、戦闘を停止したらコアも起動しなくなるはずだ。にもかかわらずいまだセラヴィーの背中から粒子が絶え間なく出てきている。

ーーーーーーーーーーーー

「ったく、シャルのやろう、派手にやりやがって、だが、殲滅用のＩＳがランチャー程度で終わるわっけはないんだよっと」

「GNバズーカフェイスバーストモード」

ーーーーーーーーーーーーー

「これで、終わりだ！」

一夏と、シャルはここで決めるとばかりに二人で同時に飛び掛った。

そのとき

「ふッ」にやっとラウラが笑ったのだ。

二人は、不思議に思いながらもチャンスとばかりに接近した。いつもどおりならどちらかが停止させられ、どちらか一方が攻撃できるはずだった。

そう、はずだった・・・・。

ここでラウラは予想外の行動に出た。停止結界を二人に対して使わなかったのだ。

「なに？」ふたりは、一瞬躊躇したが、そのまま攻撃をしようとしたそのとき。

ズギュウゥウン！！！！！

極太ビームが三人を襲ったいや、正しくは二人だ。ラウラはギリギリで避けていた。そう、避けるために、停止結界を使用しなかったのだ。

「死体はちゃんと確認しとくんだな、クそったれが」

ーーーーーーーーーーーーーーー

モニターの前で教師陣は唖然としていた。

あのときラウラはエリアが負けていないと分かっていたのか。

確かに致命傷ではあったがそれはあくまで通常のＩＳの場合。エリアのソレは特殊なのだ。

一夏とシャルロットはそこを考慮しなければならなかった。

ラウラの対策ばかりに気をとられて、本当の怪物を忘れていたのだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー

「はあはあ」二人は息を上げながらどうにか態勢を立て直した。

それから、本当の意味でのペア対決が始まった。

お互いにカバーしあって本当に手に汗握る試合になった。

だが、ちょっとした隙だった。

ラウラにシャルが、シールドピアーズを使ったのだ。

見る見るうちにラウラのシールドエネルギーは削られて０になった。

キャアアア黄色い歓声がアリーナを包んだ

直後不可思議な現象がおきた。

ラウラのＩＳが黒く包まれ。

一本の刀を持ち、とまった。

「あれは、」目を色を変え一夏が一番最初に食いついた。

「あれは、千冬姉の剣だ。あれは」そういいながら暴れる一夏を

パァン

僕ははたいた

「いい加減冷静になれ、お前がどうこうしたって変わることじゃない」

「なんだよ、お前に俺の何が」

「お前のエネルギーはもうそこをつきかけている。シャルもそうだろ？」

「うん、」

「だったら、パートナーとして責任を持って、ラウラは僕が止める。

」

「わかった。」そういって一夏は不満そうに言った。

それからラウラの前に立つと

「トランザム」

体が赤く光りだす。

そして、肩、膝、の腕と両手でラウラを抑える。しかし左手のみ、つかみ損ねてしまった。

ここぞとばかりにラウラは乱暴に片手のみで一気に刀を突き刺してきた。

「グファ」血の味がした。絶対防御が後は言え、突き刺されたら耐え切れるわけがない。

「お前は昔はこうじゃなかったよな」

「もっと、向上心があって」

「失敗作といわれても逃げ出さなかったよな」

「だから、織斑先生も指導する気になったんじゃないのか」

ありったけの気持ちをぶつけた。

「セラフィム」

背中の顔が外れていき。それを胴体としてもうひとつの姿が姿をあらわす。

「千冬さんに比べれば、たいしたことじゃないかもしれないが。」

「少しだけお前が立ち直る勇気をくれてやる」

拳に力を込めると

「もう一度やり直せ！この大馬鹿やろう！！！！」

鈍い音がした。

手には人を、キカイを殴った感触がした。

殴った直後

黒く包んでいたものがパカット割れた

僕は、すべてのエネルギーを使ってＩＳも着ていなかったが、

その中から、倒れこんでくるラウラをそっと抱きかかえた。

黒い物体から出てくるラウラは、まるで、何かから生まれてくるかのようだった。

ーーーーーーーーーーーーー

「お前は強いな」

「強くないさ」

「私はお前のその強さにあこがれていた。」

「そうか、でも、僕は強くない、本当の強さは暴力じゃないんだよ、優しさだと思う」

「優しさ・・・？」

「そう、一夏なんて、お前に何されても嫌ってないだろ？」

「あいつが私を嫌ってない？」

「むしろいつも心配していたよ」

「そうか、私はまだまだ、だったんだな」

「ああ」

「最後に言わせてくれ、ドイツでもいったが、お前が好きだ」

「・・・ごめん、僕もラウラは好きだよ、でも、君以上に好きで、泣かせたくない人がいるんだ。」

「わかった、これですっきりした。これで、私も前に進める気がする」

学年別トーナメント（後書き）

学年別トーナメント編終了です。

エリアはラウラも好きだが、それ以上に鈴が好きだって言うことです。

でも、ここ最近の話じゃ鈴の登場回数が少ないような・・・。

これじゃヒロインがラウラになってるような・・・。

決戦後の日常（前書き）

2ヶ月ぶりの更新。すいませんでした。

これからも亀更新ですが、がんばって完結を目指します！

決戦後の日常

「ああ、つかれた」

ここ最近、かなり密の濃い日々を送っているような気がする。

「それにしてもラウラか」

ベッドの上で見上げながら呟く

「僕とは違う改造人間」

つい、振ってよかったのだろうかと考えてしまう。

「いかんいかん」

首をぶんぶんと振る

「終わったことはクヨクヨしない。それにアイツは強いからな。多分大丈夫だ。」

あらかた、目標を僕から変えているのではなかろうか。

そして、横のベッドで寝る鈴を見る。

「すぅ～すぅ～」

と規則正しい寝息を立てながら眠っている

「僕にはもったいないくらい可愛い彼女だな」

今はこの幸せをかみ締めていこう

そう心に刻んでで意識を闇に沈めた

次の日

「えっと、今日は、転校生?を紹介します。」

なにやら口ごもりながら先生が言った。

がらっと教室の扉が開き

「皆さん、シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」

ええええええ!!!!!!!!!!!!!!

とクラスが騒がしくなった。

自分で解決したんだな。

僕は人知れず微笑んでいるとソレに気づいたのか

シャルがこっちへ来て

「ありがとね、エリア君のおかげで何とか出来たよ」

「いや、僕は何もしてない。そのきっかけを作っただけだ。改めてよろしくな」

そういいながら右手を出す

「うん」

とシャルも笑顔で右手を出してくれた。

それから改めて歓迎会のようなものがされ、今度こそ、シャルは本当のシャルとしてクラスのみんなから迎えられた。

放課後、鈴から買い物に誘われた。どうやら今度の臨海学校の時に水着選びを手伝って欲しいらしい。

「ねぇねぇ、エリアの好みの水着はどんなタイプ？」

うれしそうに鈴がきいてくるので正直に

「スクみｚぐは」最後まで言わせてもらえず挙句に、渾身の右ストレートを食らった。

「で、どんな水着がすき」

にこやかな笑顔を崩さないまま、聞いてくる。やばい、こいつヤンデレの素質がある！

食らった頬をさすりながら

「鈴の水着なら何でもいいよ」

とこれまた正直なことを言った。

「そ、そう、ならこれはどう？」

そういいながらおずおずと差し出してきたのはオレンジ色の意外とシンプルなビキニ（？）タイプの水着だ。

「ど、どう？」

鈴は恥ずかしそうに、自分に水着を当てている。

「か、かわいい」

「へっ・・・／／／」

しまった、つい思っていたことが口に出てしまった。

「可愛いと、思うぞ・・／／／」

畜生こっちも照れてしまう

「わかった。私これにする」

そういうと鈴はいそいそとレジへその水着を持っていってしまった。

はぁ、ドキドキもんだ、これは当日やばいかも。

それから、ちゃっかり自分の分の水着も買って二人で寮へと帰った。

寮へ帰ると、一夏がみんな（女子達、主に主要三名）に追い掛け回されている。

なにやらまたやらかしたらしい。

「おーい、エリア助けてくれ」

必死の形相で助けを求めてくる親友に

「お前はそのありがたみを少しは噛み締めるといい」

とばっさり拒否した

「そんなぁあぁぁ」

鈴と部屋に入るとそんな断末魔が聞こえた。

大丈夫さ、骨なら拾ってやる。

決戦後の日常（後書き）

みなさん、お待たせしました。

受験生で、作品掛け持ち、馬鹿だなと自分でも思いますが、やり始めたことは責任を持ってやり遂げたいと思いますので、応援よろしくお願いします。

臨海学校・・・～不穏な影～

「海だーーー」

女子が騒いでいる

「なぜだー！！！！」

僕も絶叫している

「ん？どしたの、エリア」

きょとんと鈴がきいてくる

「どしたの？じゃ、ない！なぜ僕が二組のバスに乗ってるんだ、いや、乗せられているんだ」

そう、僕は今、二組のバスに乗せられている、鈴のやつが千冬さんに頼んだらしいが・・・。

周りの目が痛い・・・。というより、ヒソヒソ話がひどい、それが聞こえるたびに、鈴が死んだような目をするのだが・・・、僕ってそんなに信用ない？それとも、鈴が以上に嫉妬深いだけ？

苦痛に耐えながら自問自答してるうちに、到着したようだ。

「死ぬかと思った・・・」

第一声がそれである・・・。
それから、宿舎の人に挨拶をし、海で泳ぐことに、なったのだが、
いかんせん僕は、泳げない！
一人で頭を抱えていると
「つっかまーえた」
鈴に後ろから抱きつかれた
「馬鹿、恥ずかしいだろ」
テレながら反論、しかし、一向にはなしてくれない

そのとき、
ピキィーン
「ん！？」
今何か、頭に
「どうかした？」
鈴には聞こえていないらしい
（「クルト・エリア」、君に取って置きのプレゼントだ、改造人間さん、大切な人たちを守れるかな？では、健闘を祈るよ」）

機械音で、頭に響く声

「誰だ！僕の脳量子波に干渉するのは！」

「どうしたのエリア？」

鈴がすごく心配そうにきいてくる

「いや、大丈夫、ちょっと疲れたみたいだから、木陰で休んでくるよ」

「じゃぁ、私も行く」

鈴と二人で海の近くの林に行った、これから起こる悪夢をこのときまだ僕は知らなかった・・・。

その悪夢は、僕の過去をえぐり、トラウマをよみがえらせるものだった。

キュリオス

鈴と一緒に森の奥へと進んでいく。

よくテレビでなっているような鳥の声や動物の鳴き声が聞こえてくる

「ねぇ、ちょっと危なくない？」

「いや、大丈夫だ」

僕の腕にしがみつき怖がっている鈴を僕は大丈夫だと言い聞かせる

キィーン

（あらあら、お連れまで連れてきて大丈夫？）

相変わらず機械音は頭に直接鳴り響く

しばらく歩くと、浜辺に出た

「ここは・・？」

回りを見渡しても海以外何もない、浜辺だから当たり前だが、浜辺なら、近くにみんながいるはずだ。

僕たちは、知らず知らずにとんでもないところに誘導されたようだ

キィーン

（ククク、プレゼントだよ、せいぜいがんばってくれ）

「プレゼントとは何だ、何の目的で僕をここまでｒｙ」

呼んだのだと言いたかった、だが、それは、なぞの襲撃によって口に出来なかった

目も前にたたずむＩＳをみて、ただ呆然とするしかなかった・・・

「ちょっと、エリア、速くＩＳを起動しなさいよ！」

鈴が、せかすが僕にはこの状況が理解できなかった・・・。

なぜなら

なぜなら、目の前のＩＳは、僕が、前に倒したはずなのだから

そう、そのＩＳの名は

「・・・キュリオス！」

唇をかみ締め、僕は苦々しく呟く

「鈴、今すぐ、みんなに知らせろ、これは、僕でも対処できるか分からない」

「いや、絶対一緒に」

鈴は駄々をこねたが、相手はそんな生易しいやつではない

「頼む」

僕の懸命の説得に

「わかったは」

鈴は悔しそうに空へあがると、みんなのいるビーチに向かって飛んでいった

独りになった浜辺でキュリオスと対峙する

「久しぶりだな」

ＩＳを起動しながら話す

「テルヤ、テルヤヒビキ」

ググググとキュリオスの顔が僕を捉える

「まさか、二階も殺り合うとはな！」

起動したセラヴィーで先制攻撃を仕掛ける、だが、機動性に優れるキュリオスはいとも簡単にさける

「そうだな、久しぶりだ」

脳量子波ではなく今度は、ちゃんとした声で耳に届く

「俺としても二度と戦いたくなかったよ、だけど、仕方ないだろ？生きるためだから！」

キュリオスはビームマシンガンで牽制しながら、ビームサーベルを持って接近してきた

「なめるな！」

僕も、ビームサーベルを持ち、肩の砲撃で牽制しながら同じように接近した

「くぅぅ」

「チッ」

お互いに致命傷にはならず一度離脱

一定の距離で留まり対峙した

「衰えてないな」

テルヤはいった。とても切なそうに、理由は分かる、僕の実力が鈍っていたら、倒す価値なしと上に報告すればいいのだから

だが、僕も衰えるわけにはいかなかった、守るべき人を見つけてしまったから

「ああ、でも、そっちも相変わらずやな戦い方するよな」

ハハハとお互い笑いあった、海上でしかも、ＩＳを起動して、殺し合いをしているのにもかかわらず

ひとしきり笑い終え「はぁ」とテルヤがため息をつく

「こっからは本気だ」

長い前髪に隠れていた赤い左目が表れる

「それは、こっちのせりふだ」

僕も、目を黄金にかえ、応戦する

ｓｉｄｅ　ｒｉｎ

私が、みんなの元に戻ったときそこでは違う問題が起こっていた

アメリカのＩＳ福音が暴走したのだ、暴走というより何者かに操られたというべきなのだろうか。とにかく、こっちに向かっているらしかった

私も専用機持ちということで、急遽その作戦に抜擢されることになった。

だが、そこにたまたま?居合わせていた箒の姉の束さんがきていたため、またまた、急遽、箒の専用機のテストにサポートとして一夏も箒と一緒に福音を迎え撃つことになった

私は、作戦からはずれたことよりも、エリアが心配でたまらなかった

箒と一夏の二人が迎撃しにいった後、私は、織斑先生にエリアのことを報告しに行った

すると先生は珍しく表情を替え

「まずいな」

と一言だけ言って山田先生を呼び止めると席をはずすと一言言って出て行ってしまった。

私はただただ祈ることしか出来なかった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

僕たちの戦いは熾烈を極めていた

僕が瞬間加速で回りこむとそれを見越したように後ろからビームマシンガンで攻撃を仕掛けてくる

僕もすぐさまＧＮフィールドを展開し攻撃を退ける

逆に砲撃をかいくぐり、僕も目の前へきた、しかしそれを僕は掴み、パワーで押して海中へ沈める

こういった感じで一進一退の攻防を繰り広げ、戦闘開始から早２時間経過した

「はあはあはぁ」

「はあはあはぁ」

互いに息を切らせ後何回かしか攻撃できないところまで来ていた

「最後だぜ」

「そうだな」

互いに笑顔でうなずきあい

（実際フェイスがオープンじゃないから笑顔かどうかは分からない

が、多分あいつなら笑っているだろうと思った）

「トランザム」

「トランザム」

同時に叫び、高速の世界に入る、常に瞬間加速のような戦いで僕たちは死闘を繰り広げた

僕は、親友と殺しあわなければならないこの運命を憎んだ、多分それはテルヤもそうだろう

互いに望んで作られたわけではないのだ

だが、僕は負けるわけにはいかない

ほんの小さな隙だった、隙にも見えなかったかもしれないほど小さなものだった

その隙に僕は、接近し、六本腕でビームサーベルを持ち一気に畳み掛ける

「うおおお！！！！」

テルヤは珍しく雄たけびを上げながら一本一本腕を切り落とす、だが流石に六本もあっては間に合わない

「これで最後だ」

残った二本の腕でクロスにきりつける

「クソおおおお！！！！」

テルヤは相打ち覚悟で、シールドニードルで僕の腹部を狙う、さらにそれだけでは終わらず、シールドのない腕でビームサーベルを持ちそのまま、きりつける

ドオオオオオン！！！！

周囲に爆音が広がる

爆煙が晴れると、そこには、辛うじてセラフィムで逃げた右手を失った僕と、残った左手で気絶しているテルヤの姿だった。

ｓｉｄｅ　ｔｉｈｕｙｕ

私はあせった

また昔のようなことになるのではないのかと

ドイツにいた頃、エリアとラウラのほかにもう一人仲のよかったやつがいた、その名は

「テルヤヒビキ」

いつもどおり訓練していた最中、改造のし過ぎで、テルヤはついに暴走、エリアは、軍の命令に従って、暴走したテルヤが駆るキュリオスを撃退した。

その後の彼の行方は分からないが、まさかと不安がよぎる

ドゴオオオオン！！！！

近くで爆音がした

私は爆煙が晴れるのを待った

そこにいたのは、無事とは言いがたい二人の姿だった。

キュリオス（後書き）

かなり遅れてすいません。

オリジナルルートとまっしぐらです^^;

これからも亀更新で駄文ですが、完結目指しがんばります^^

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5724r/

ＩＳ－インフィニット・ストラトス　大天使ラファエルの申し子

2011年12月8日01時50分発行